

平成二十九年度諏訪東京理科大学学位記授与式学長告辞

本日、卒業や修了の日を迎えられる学生、院生の皆さんに、まずは心から、お祝いを言いたいと思います。同時に、ご参列いただいているご両親やご家族の皆様にも、ここまで大切に育てて来られたお子様方が、今日のこの日を迎えられたことに、心からのお喜びを申し上げます。また、本日は来賓の方々のご臨席を賜って、この卒業式を執り行うことが出来ますことを、厚く御礼申し上げます。加えて、学校法人東京理科大学からは、本山和夫理事長と、同窓会から増淵次期会長が参列しておりますことを、ご紹介させていただきます。

さて、今更申し上げるまでもないと思いますが、本学はこの4月から公立大学として新しく再スタートを致します。したがって、この卒業式は、学校法人東京理科大学に属する本学としては最後の卒業式となります。この機会に、これまでの本学の歩みを少し振り返ってみたいと存じます。元来この地域は、中小規模企業を中心とした精密工業の集積地として発展してきました。そのためこの地域では、地域産業の振興や若手技術者を育成するために大学を設置しようと考えられ、平成2年4月に本学の前身である「東京理科大学諏訪短期大学」が開学しました。茅野市をはじめとする諏訪地域の6市町村と長野県、および地元産業界が協力して敷地と建物を提供され、学校法人東京理科大学が教育と研究の設備とノウハウを提供する、いわゆる公私協力方式であります。その後、さらに高度な教育と研究を行うことができるよう、平成14年からは、4年制の大学に改組して、現在の諏訪東京理科大学が誕生しました。従って、本学が短大として開学してからは28年が、4年制大学に移行してからは16年が経過しました。この間、短大時代には約4千名、4年制大学になってからは皆さんを含めて約3千名、合計約7千名の卒業生を送り出してきました。大学院では、修士課程170名、博士後期課程7名になります。つぎに学部卒業生の就職先についてみますと、4年制大学以降では約70%が地元の諏訪圏及び長野県に就職し、この地域の振興に貢献してきました。これによって本学も、この地に招聘された大学としての、最も重要な使命を果たして来ることが出来たと考えています。

しかし、本学を取り巻く社会情勢は、決して平穏ではありませんでした。短大が開学した平成2年は、ちょうどバブル景気が終了したと言われる平成3年にほとんど一致しており、その後平成8年にはいわゆるリーマンショックが起きました。また、日本の人口も、とくに若い人たちを中心に平成3年頃をピークとして、大きく減少に転じ始めました。大学としては、約束した定員の学生をこの地に集めてしっかりと教育を施すことも重要な役目ではありますが、この点については、とくに最近の10年間、十分にはその役目

を果たせて来ませんでした。この原因は、このような厳しい社会情勢にもありますが、本学の側、とくに本学を代表する私の力不足にもあります。しかしながら、このような状況下でも、変わらぬご支援を頂いた地元自治体をはじめとする地元の皆さま、並びに学校法人東京理科大学に、厚く御礼を申し上げたいと思います。

人口減少の問題は、とくに「地方消滅」という増田寛也氏の本が刊行された頃4～5年前から、その影響の大きさが強く認識されてきました。そのなかで、地方にある大学は若者を地域に集めることのできることから、その価値が大きく見直され始めました。そこで私たちも大学として出来ることは何かと考えたとき、それはまず第一により学びの環境を提供して人を集め、よい人材を世の中に送り出すこと、そしてとくに我々としては、理系の大学である特長を生かしてよい働き場所を作るための技術支援をすること、であろうと考えました。この基本に立って、地元自治体と協議した結果得られた結論が、本学の公立化でした。

公立化ばかりではなく、教育と研究の面でも、あらたに変わっていく必要を強く感じて、大学内ではすでに7～8年前から、新しい大学の方向性を検討し始めました。当時はまだ、人工知能やIoTは世の中にはあまり知られてはいませんでした。コンピュターやインターネットは既に広く普及しており、本学でもその方面には、十分高いポテンシャルを持っていました。そこでこの方面の教員を集めて新しい学科としたのが、コンピュータ・メディア工学科でした。また、工学部の他の学科においても学科名称や教科の内容を再検討し、経営情報学部においても情報系の教育を強めていくように舵を切って参りました。今年の卒業生諸君は、この再編した学科の最初の入学生にあたります。

このように情報通信技術の重要性を認識しての学科再編でありましたが、その後のこの方面の科学技術の発達、予想を超えてめざましいものでした。とくに人工知能の発達です。最近、将棋の世界で、藤井聡太くんという中学生が、プロになってからの連勝記録を立てたり、最年少で6段になったりして話題を呼んでいます。藤井くんの強さの原因の一つは、コンピュータソフトとの対戦から学んでいるからだろうと言われています。また少し前には、将棋の対戦中にしばしば席を立つ棋士がいて、コンピュータに相談に行っているのではないかと疑惑を持たれたこともありました。これらのことは、すでにコンピュータが人間と同等、あるいはそれ以上に強くなっていると認められている証拠です。

ここでは囲碁のことには詳しくは触れませんが、囲碁の世界でも、人工知能が人よりも強くなったことが、ちょうど一年前くらいから広く認められています。しかしだからといって、人間の価値が変わるわけはありません。藤井くんは、たとえ人工知能の知恵を借りて練習をしてきたとしても、中学生という短い期

間でこんなに強くなっていること自体が素晴らしいのです。

将棋や囲碁は、ルールがしっかり決まっているから人工知能に有利なので、実際の間人社会は複雑で、そうはいかないとよく言われます。たしかにそういう側面はありますが、将棋や囲碁の世界で人工知能が短期間に人間の能力を上回ったように、幅広い分野で人工知能が我々の生活に入ってくることは容易に予測できます。

いまは大きな転換期ですから、これから人工知能と人の関係がどうなっていくか、完全にわかっている人は、だれもいません。しかし、いまある仕事のかなりの部分は、人工知能に置き換えられるであろうと言われていますし、わたしもそう思います。人工知能そのものを開発すること自体は大変大きなむずかしい仕事ですが、それを現場に導入するためには、新たに多くの技術者や事務職者が必要となります。そのための基礎力については、皆さんにはこの四年間で他の大学に決して負けない学習をしてもらっています。ですから皆さんには、人工知能にとって代わられるのではなく、人工知能を使う側に回るように、経験を積んでいてもらいたいのです。これからの世の中は大きく変わろうとしています。これに対応するためには、われわれも変わっていかなければならないことを、ぜひ心に留めて巣立ってほしいと思います。

さて、最後に、この地域での最近の大きな話題に触れたいと思います。それはなんとと言っても、先日のピョンチャンオリンピックの女子スピードスケートで、小平奈緒さんが、千 m で銀メダル、5 百 m で金メダルを獲得したことです。小平さんのことは、去年のこの卒業式でも紹介したのですが、小平奈緒さんは、この大学のすぐ近くの茅野市豊平で育ち、豊平小学校から北部中学校で学びました。奈緒さんは、中学校時代に全日本ジュニア選手権で高校生を抑えて、史上初の中学生優勝を成し遂げて、注目を集めました。しかし、その後の道のりは、決して平坦なものではありませんでした。自分の指導を受けたいコーチのおられる大学に進学し、自らの選手生活を支えてくれる所属先を見つけましたが、オリンピックでは苦しい戦いがつづき、前回のソチ五輪は自分でも「屈辱」といっておられる状態でした。それでも自らを立て直すべく、二年間オランダに滞在して、世界トップのスケート社会に接し、その技術を身につけてきました。まさに「自ら課題を設定し」、「それを達成する方向を見いだし」、「グローバルに活動して成長していく」、という今まさに言われている教育の方向性を具現化しているような人です。

皆さんは秋山仁先生のことを知っていると思います。秋山仁先生は、東京理科大学のご出身で皆さんの先輩です。その秋山先生が、この地方の新聞のコンパスというコラム欄に、小平さんが金メダルを獲得した直後に、「本当のプロフェッショナルとは、その分野のことしかわからない人のことではなくて、そ

の仕事を通じてトータルに人間を感じさせる人のこと」だ、「今回の魅力的なメダリストの中でもとくにプロフェッショナルを感じさせたのが、小平選手だった」といっておられます。

小平さんは、自分のスケート人生を「他の人と比べたら、スロー再生のような競技人生だけれど、いまも、「昨日の自分を越えること」を目標にしている」と、言っています。しかし、努力は報われるとより美しく輝きます。わたしも、今年のピョンチャンで小平さんの努力が報われたことを、本当にうれしく思います。きっと奈緒さんは、これからも昨日の自分を越えるべく、一步一步進んで行かれることでしょう。今日卒業する皆さんも、どうか本学で学んだ昨日の自分を越えるように、着実に前へ進んでいただきたい、そして皆さんにとっても、その努力が報われることを、心から願っています。

今日は、この大学にとっても、これまで大きな母体であった東京理科大学から独り立ちする卒業の日です。踏み出す先は、荒波の世界かも知れません。しかし、これまで一緒に歩んできた教職員の皆さん、地元地域の方々、そして学生諸君、卒業生の皆さんと力を合わせて、「昨日の自分を越えること」を目標として、船出をして行きたいと思います。

では、最後にもう一度、今日のご卒業を心からお祝いして、私の式辞といたします。

平成三十年三月二十三日

諏訪東京理科大学 学長

河村 洋